堀川開削410年をふりかえる

堀川をめぐる人びと

いつも心に川がある
堀川まちづくりの会企画展

四間道に尾張名古屋の品格 川伊藤家

南陽地区新田開発

新田所有二百数十町歩の開拓者

川伊藤家と南陽地区の人たちとは深いかかわりがある。南陽地区は、木曽川・庄内川に挟まれた河口に位置し見渡すかぎり海原で、長い年月の両川から運ばれてきた土砂の堆積により浅瀬となっていたのを徳川義直初代藩主の命により、寛永17年(1640)八田村の東福田新田から新田の開拓が始まったといわれる。文政5年(1822)に川伊藤家の伊藤喜左衛門が藤高前新田を開拓する。

のちに藤高新田など、開発工費が一部川伊藤家からの借用だったため川伊藤家に売却され、その後川伊藤家の新田所有は、藤高新田113町歩・藤高前新田94町歩・七島新田24町歩・茶屋新田4町歩・金城村2町歩といわれ(金鯱叢書)、この頃年貢を収穫すると、千石船で庄内川から熱田を回り、堀川を遡り、川伊藤家の表蔵のあるところから荷揚げしたといわれ、全盛期には蔵が12棟もあったという。新田開拓は、いいことばかりではなかった。南陽地区は海に隣接しているため、幾多の被害を受けるたびに修復などが行われた。昭和21年農地改革の際には、小作の人たちの先祖が代々育ててくれた土地だからと、率先して明け渡したと「堀川」の本に14代目伊藤利彦氏が話している。農地改革が行われたのちも、小作人がたびたび川伊藤家に米を届けたり、15代目が亡くなられた際には駆けつけたりとも聞く。現在も農地改革時の川伊藤家の碑が南陽町に残っている。

南陽町に立つ伊藤利彦頌徳碑

川伊藤家の今昔

清須越しで大船町へ

川伊藤家の先祖は藤原氏の出で、初代伊藤喜左衛門が慶長19年(1614)清須の廻間町からのちの大船町に引っ越してきた清須越し商人の一人。同じ清須越しの商人、茶屋町の呉服屋伊藤次郎左衛門と区別をするために、通称「川伊藤家」といわれている。

屋号は伊藤屋。初代・2代目と炭薪の商売をして4代目忠左衛門の時には、炭薪の商売をやめて味噌、穀物の商売を始め、延米(のべまい)支配人(決済期日を決め手付金だけで有米の売買契約を結ぶ先物取引管理者)を藩から命ぜられている。4代目忠左衛門が、享保7年(1722)現在の本家にあたる建物を分家として入手している。(享保9年の大火で被害に遭っているようで、現在の建物は大火以後のものではないかといわれている。)

7代目の時には、米穀問屋を家業の中心として他にも藩の役職を命ぜられ、8代目忠左衛門は、寛政7年(1795)に尾張藩が御勝手御用達制度(御用達商人の格付である三家衆・除地衆・十人衆等々に従い軍事費や物品の調達などを行う藩財政の担い手制度)を始める時に選ばれている。その際には、帯刀出座・宗門自分札の待遇が与えられた。その後、三家衆(関戸家・伊藤次郎左衛門・内田家)に続く四家(除地(じょち)衆=熊谷・岡谷・小出・川伊藤)という御用達格付けの上位にいた。藩主の参勤・帰国の際に出迎え・御目見など永年の待遇を藩から受けている。(川伊藤家文書目録)

往時を彷彿とさせる屋敷構え

現在美濃路沿いに残る、県の指定文化財になっている建物を見ても、川伊藤家の繁栄ぶりがわかる。真ん中の本家を最初に入手し、延享3年(1746)親類から購入し、北側の新座敷として増築。天明2年(1782)隣の土地を購入し南座敷を増築。現在の景観になるのは、文政2年(1819)に増築した表の連子・格子・戸障子などを整備し、元は板葺だった大屋根も瓦葺に直した時だ。

家の内は、仏間は格天井で花の絵が描かれ、壁には秋の七草が描かれている。また新座敷の奥にある庭は、名古屋にある茶道の家元・松尾流二代目が造ったといわれる。庭に面した北側の壁の部分と縁台の部分には、覆いがかぶさっており、大事なお客様が来られた際には、大工にすべて取ってもらうとのこと。この覆いが、雨風をしのぎ本来の縁台や壁を保ってきた。また戦時中も戦災にあわず、伊勢湾台風の時も煙突が少し壊れたくらいだったという。

川伊藤家の建物の現存は、歴史的にも那古野地区にとっても大変貴重なことである。

美濃路に面した川伊藤家

川伊藤家　ニワ

新座敷から庭

次の間から庭　（撮影・麓 和善）